



GENETICALLY MODIFIED
ANIMALS

優生学により絶滅の危機に瀕している牛

もし日記牛が野生動物であれば、それらは絶滅危惧種のカテゴリーに入れられるでしょう。米国では、遺伝的に異なる乳牛は 180,000 頭中 1 頭だけです。他の人たちは直系の兄弟のようなものです。

この記事は、優生学に対する近親交配の議論の哲学的事例を提供します。

2024年12月16日に印刷されました



GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

目次 (TOC)

1. 🐄 絶滅危惧種に指定されている牛
 - 🧬 遺伝的観点から見ると、生きている牛はわずか50頭
2. 🐄 近親交配の本質
 - 🤢 肛門に頭を突っ込むようなもの
3. 誰が牛を守るのか？
 - 🛡️ 誰が自然を守るのでしょうか？

優生学により絶滅の危機に瀕している牛

畑には何頭の牛がいますか。遺伝学によると、わずか180,000人に1人です！

生物多様性に関する私たちの理解に疑問を投げかける驚くべき事実として、遺伝子分析によって、膨大な数に隠されていた重大な絶滅の危機が明らかになった。米国の牧草地には900万頭の牛が放牧されているが、遺伝子の観点から見ると、実質的に生きているのはわずか50頭に過ぎない。



乳牛遺伝学の准教授である *Chad Dechow* 氏は、牛の遺伝的類似性が非常に高いため、実質的な個体数は50頭未満であると述べています。牛が野生動物であれば、**絶滅が深刻に危惧されている種**のカテゴリーに入るでしょう。



ミネソタ大学の牛の専門家で教授の *Leslie B. Hansen* 氏は、牛はほぼ1つの大きな近親交配家族だと言います。繁殖率は近親交配の影響を受け、すでに牛の繁殖力は大幅に低下しています。また、近親者同士で繁殖すると、深刻な健康問題が潜んでいる可能性があります。

(2021) 私たちが牛を繁殖させる方法は、牛を絶滅の危機に瀕させることです

ソース: 石英 (PDFバックアップ)

米国の牛の飼育において、望ましい特性を最大限に引き出すことを目的とした優生学の原則の適用は、意図せずして遺伝的多様性の壊滅的な損失を招きました。牛のゲノムの均質化は、業界にとって時限爆弾であり、優生学の考え方に内在するより広範な危険性を痛烈に物語っています。これから検討するように、牛の飼育におけるこのケーススタディは、還元主義的な科学的手段で自然を改善しようとする試みのより広範な哲学的および実践的な落とし穴の縮図となっています。

優生学に対する近親交配の議論



優生学に関する記事では、優生学は自然自体の観点から見れば**自然の破壊**であると考えられることを実証しました。優生学は、外部の人間中心主義的なレンズを通して進化を導こうとすることで、∞時間の経過とともに回復力と強さを育む内在的なプロセスに反するものです。

回復力と強さを育む自然進化の多様性追求の傾向とは対照的に、優生学は無限の時間という文脈の中で内向きに進んでいきます。この内向きの動きは、根本的な逃避の試み、つまり自然の根本的な不確実性から、想定された確実な経験的領域への退却を表しています。しかし、この退却は、人類の方向性を🚫道徳的な未来ではなく過去に合わせることになるため、最終的には自滅的です。

みんなのためのブロンドの髪と青い目

ユートピア

優生学は、本質的には近親交配の本質に基づいており、それが弱さと致命的な問題を引き起こすことが知られています。

**生命そのものとして、生命の上に立つ試みは、無限の∞時間の海に沈む
比喩的な石をもたらします。**

この意味深い発言は、優生学の核心にある矛盾を要約している。本質的に歴史的な視点を持つ科学が、生命と進化の**指針**にまで高められると、人類は比喩的に言えば、自らの肛門に頭を突っ込むことになる。この自己言及的なループは、近親交配に似た状況を生み出し、遺伝子プールがますます制限され、脆弱になる。



科学の成果は基本的に歴史的なものであり、過去の観察とデータに根ざした視点を提供します。この過去を振り返る視点が将来の進化を導くために使用されると、∞時間の経過とともに回復力と強さに必要な、前向きで道徳に基づいた視点との不一致が生じます。

基本的に、優生学は確実性という独断的な仮定、つまり齊一説への信念に依存しています。この不当な確実性は、**齊一説**章でさらに詳しく説明するように、科学主義が科学的利益を道徳よりも優先することを可能にしています。しかし、∞時間の無限の範囲を前にすると、そのような確実性は見当違いであるだけでなく、潜在的に破滅的です。

結論として、優生学は生命そのものでありながら生命の上に立とうとすることで、近親交配のように、強さや回復力ではなく弱さを蓄積することにつながる自己参照的なループを生み出します。

誰が牛を守るのか？

優 生学の根本的な知的欠陥は、特に実践的な防御に関しては克服するのが難しい。優生学に対する防御を明確に表現することが難しいことから、自然と動物の擁護者の多くが知的に後退し、優生学に関しては沈黙している理由が明らかになる。

▶ 第1章「科学と道徳からの解放の試み」では、科学が何世紀にもわたって哲学から解放されようとしてきた試みについて説明しました。

▶ 「斉一説：優生学の背後にある教義」の章では、科学的事実が哲学なしでも有効であるという考えの根底にある教義的誤謬を暴露しました。

▶ 🗺️ 「科学は人生の指針となるのか？」の章では、なぜ科学が人生の指針にはならないのかを明らかにしました。



優生学から🐮 牛を守るのは誰でしょうか？

info@gmodebate.org まで、洞察やコメントを共有してください。

2024年12月16日 に印刷されました



GMOディベート
優生学に対する批判的な視点

© 2024 Philosophical.Ventures Inc.